

## はしがき

本書は、社会福祉に関する法律や制度を勉強したいと考えている初学者の方に読んでいただくことを目的として作られた。したがって、憲法や民法などの法律の基礎知識も説明しながら、法学の知識をもっていなくてもわかるような入門的な学習の教材となるよう心がけた。社会福祉学部や看護学部で新たに社会福祉の法制度を学習しようとする方々に活用していただくことを念頭においてはいるが、さらに法学部、政治経済学部、総合政策学部、社会学部の学生でも使用に耐えるものとする事とした。

実は、2007年に、「社会福祉士及び介護福祉士法」が改定され、専門職となるためのコースの科目編成が、大幅に変更された。本書は、資格試験の受験勉強用といった目的をもつものではないが、資格取得を目指す方たちにとっても、これから始まる専門的な職業に不可欠の知識や考え方を提供することができる。また、上記の資格を取得し、キャリアをもっている方々にも、ご自身の職業を法的に再検討してみるよい機会を提供することができると思う。

編集上、資格試験対策用の教材作成を意図したわけではないのだが、2007年改正法による、新しい社会福祉士養成課程における「現代社会と福祉」の教材としても活用できるし、また新法上の介護福祉士養成課程における「社会の理解」という領域の学習もできるようになっている。これらの資格をすでに有する方たちにとっても、学びなおしのチャンスとなるであろう。

そして、さらには、必ずしも社会福祉の専門職ではなくても、現代社会に生きる市民が知っておかなければならない社会福祉の制度を、わかりやすく解きほぐす書であるとともに、市民の側からの「批判的視点」が盛り込まれており、社会福祉法政策に対するクリティカルな検討の素材と考えていただいてもよい。

ただ、「わかりやすく」と言っても、社会福祉法制を単純化して説明するのではなく、本書は、社会福祉に関する法制が「なぜ、複雑化しているのか」、

「本当に複雑化しているのか」、「複雑に見えるとすれば、そうさせている原因は何か」といった疑問に答えるような叙述を目指しており、クリティカル（批判的に）に考えるプロセスを大切にしている。また、人生の各段階（ライフステージ——まさに揺りかごから墓場まで）に応じた生活実態の分析や変貌し続ける混沌とした福祉現場の問題状況の把握をし、隣接する法領域との整理もしながら、関係する法の構造を解析しようとする。児童福祉法や老人福祉法といった、与えられた法律の解説をして、既存の法の構造から現実を分析しているのではない。

このために、各章の内容は、3節に分かれており、第Ⅰ節は、統計・事例などを用いて、テーマに関する実態を明らかにしている。それによって、制度、政策からもれていたり、排除されている問題群が描き出されている。また、第Ⅱ節においては、既存の教科書にあるような単なる法律の羅列と解説ではなく、Ⅰ節で述べた現実をふまえ、社会・経済の構造と法の関連を論じている。これまでの定説にとらわれず、各章担当の執筆者の思いや学説に基づいて分析されている。さらに、第Ⅲ節では、テーマに関する今後の展望、方向性などが記述されており、学習にあたっての応用編となっている。

ときには、裁判所の判例を使用することで現実を把握し、法の構造分析につながるような意味あいをもたせたり、コラムの囲み記事で、アクセントを出している。それでも、社会福祉や法律に関する難解な概念が登場するかもしれない。たとえば、「自立」「自己決定」「契約」といった概念には、最初戸惑いを覚えることだろう。しかし、本書から、統一的な概念規定を探し出し記憶するのではなく、各章のなかで何が問題として論じられているのかを、自ら考えるよすがにしていただければ幸いである。資格取得のためのマニュアルではなく、生活の実態や政策について、考え考え考え抜いて、根底から批判すること、それが本書の狙いだからである。

2008年3月

執筆者を代表して

大曾根 寛